

『金綱集』における「見性成仏義」について

古 瀬 珠 水

はじめに

筆者は近年、金沢文庫所蔵『見性成仏論』について研究してきたが、本稿では日向撰『金綱集』「第七禪見聞」⁽¹⁾に引用された「見性成仏義」を取り上げる。鎌倉時代、日蓮宗における「見性成仏義」(または『見性成仏論』)の意義を探るとともに、「見性成仏義」と原本を同じくすると思われる金沢文庫所蔵『見性成仏論』との比較研究を試みる。

先ず、『見性成仏論』からの引用文を有する他宗の資料について、今まで明らかになつてゐる点は以下のとおりである。

① 頼瑜撰『顕密問答鈔』巻下

千葉正氏が「中世真言密教の禪宗観―道元禪における密教研究の必要性―」のなかで「日本達磨宗の数少ない文献として知られている『見性成仏論』からの説と思われる文が一ヶ所だけ記されている。」とし、『顕密問答鈔』下巻の冒頭部分を挙げている。⁽²⁾ 筆者は別稿にて千葉氏の指摘した箇所以外に

も『見性成仏論』からの引用文があることを指摘した。⁽³⁾

② 『金綱集』「第七禪見聞」

石川力山氏が「日蓮の禪宗観―『金綱集』における禪宗批判の根拠とその史料―」の中で「『金綱集』には『見性成仏論(義)』から長文の引用がなされており、さらに日蓮の達磨宗批判は能忍だけでなく(後略)⁽⁴⁾と指摘している。前述した千葉氏も石川氏同様、『見性成仏論』が達磨宗という一宗派の文献であるかのような前提に立つて論述されている。これらについて筆者は別な考えをもっているが、ここでは立ち入らず石川氏の指摘を受けて、『金綱集』における「見性成仏義」及び金沢文庫所蔵『見性成仏論』との比較研究のみをする。(以後、『金綱集』「第七禪見聞」における「見性成仏義」は『義』と、金沢文庫所蔵『見性成仏論』は『論』と略す。)

一 日向撰『金綱集』「第七禪見聞」における「見性成仏義」

『金綱集』「第七禪見聞」には「禪祖師頌筆等事」として、達磨作『血脈論』、『悟性論』、『破相論』そして「見性成仏義」を掲載している。これは、日向または日蓮宗の人々にとって「見性成仏義」が日本の禪宗の祖師によって書かれた文献であったと認識していたことは明らかであり、当時如何に大事な禪の文献だったとも言える。

さて、『義』を『論』に照らし合わせれば、五箇所から抜粋している。『論』全体から見ると必ずしも多い量ではないが、資料的考察する上で極めて重要である。

『論』は、禪の語録や『宗鏡録』からの引用文が半分くらいを占め、第八番目の問答などは問いも答えもほとんど引用文から構成されている。ところが、『金綱集』では『論』における引用文のみの箇所は抜粋せず、筆者あるいは答者によつて語られた部分が多い箇所を吟味して抜き出していることが解る。言うならば、日向または日蓮宗の人々が「見性成仏義」（または『見性成仏論』）を日本の禪宗の祖師の言葉と捉え、それを理解する為に熟読していたことが推察できる。

「禪祖師頌筆等事」に抜粋引用された内容は、先ず、『血脈論』から四個所、『悟性論』から二箇所、『破相論』から一箇所抜粋引用している。次に「見性成仏義」である。『論』を参考に五箇所に分けてそれぞれの内容を考察してみたい。『義』も『論』も読みやすいように、漢字と平仮名交じりの訓読文

『金綱集』における「見性成仏義」について（古瀬）

に変えた。注意を喚起する部分には筆者が傍線を引いた。引用文と思われる箇所は《 》を付した。また、適宜「」などを付した。）
①『論』問答第三の「問」と「答」（『金沢文庫資料全書 第一巻 禪籍篇』一七七頁下—一七九頁上）

問て曰く「迷へる者は悟りに迷へるのみにあらず。迷ひの迷ひたりけむ由にも迷へり。悟れる人は迷ひの覚めたるのみにあらず。悟りの悟りたる理をも悟れり。爾れば迷ひの前の是非は、是非共に非なり。悟りの前の是非は、是非共に是なり。然れば我の迷ひは人にあらざれば、人の悟りも吾にあらず。夢覺めたる人と睡れる人と床を並べ座を同じ、所隔てざれども夢人は品品の事を見れども、覺人は全く品品の事を見ざるが如し。見性の人は生死の生滅を見ず、涅槃の生滅をも見ずと云えども、未了の徒、何としてか此れを厭ひ彼を欣ぶ。何なる法水を浴してか煩惱の塵を淨め、何の佛燈を挑てか菩提の道を審めんと云ふなり。」

答て云く「《船梭すれば岸移り、雲騷げば月運ぶ。移ると見ゆる岸の外に、移らざる岸も無し。運ぶと見ゆる月を離れて、運ばざる月も無し。只、移ると見へつる岸の移らざる岸にて有り。運ぶと見へつる月の運ばざる月にては在りけるなり。》⁽⁵⁾此の譬ひを以て意得べし。意識の舟走れば、菩提の彼岸も移るに似たり。無明雲騷がしければ、本覺の月も運ぶに相同じ。身を離れて有ると思へる菩提の外に、身を離れざる菩提も無し。離れたりと思える菩提の離れざる菩提にては有り。心外に有ると思へる本覺の離れざる本覺にては有りけり。實に船留まりぬれば移らざりけりと知り、雲晴れぬれば運ばざりけりと悟りぬ。意識の船忽ちに留まり、無明の雲俄かに晴れぬれば、菩提の覺岸は不動不變にして、本覺の圓月は無去無去（來）なり。」

『金網集』における「見性成仏義」について（古瀬）

この箇所では、問者が悟りへの具体的な方法を尋ねるが、答者は比喻などを用い、既に自身がさとりの世界にいることに気づくよう説法する。さとりの世界を「本覚」と表現している点は留意されるべきと考える。

②『論』の問答第四の「問」と「答」（『金沢文庫資料全書 第一卷 禅籍篇』一七九頁上—一八〇頁上）

又云う。問て曰く「實に此の如く説くを聞くに、尊高甚だ尊高なり。幽深甚だ幽深なり。」又云う。「《朝四暮三する時は、猿此れを悦び、朝三暮四する時は猿此れを嘆る。》⁽⁶⁾法は何れも利益無きにあらずれど、根機に随へば現益莫大なり。これに依りて佛語佛心の品を分け、教内教外の理を説きたまへ。出離の遅速を知り得脱の可否悟らむ。」

答て曰く「筆を執りて書かんとすれば大海に墨繩を打つに似たり。詞を以て語らむとすれば虚空を噛むに異ならず。然りと雖も指を以て月を指し、繩を以て兔を取ること無きにあらず。但し指を瞻りて月忘れ、繩把て兔取らずば、何ぞ空に向ひて星を計え、海に臨みて沙を翫ぶに異ならん。然るに説くを聞きて詞を取らず、ただちに心を悟り顯すべし。」

『論』では、『義』の「（前略）幽深甚だ幽深なり。」と「又云う。朝四暮三する時は、猿、此れを悦び（後略）」の間に「然れば及ばざるよと《蝸角の穹昊天に着かざるに似たり。至らざること焦繞溟渤、底を踏まざるが如し。》⁽⁷⁾但し願わくば微著に至り、淺より深に至ること無きにあらず。（そへに）」の一文がある。元々『義』の親本にこの一文が省略されていた

可能性も十分考えられるが、「蝸角の穹昊天に着かざるに似たり。至らざること焦繞溟渤、底を踏まざるが如し。」は空海撰『秘藏宝鑰』からの引用文であることから、日蓮の「真言亡国」の批判精神を背景に、故意に省略した可能性もあるうかと思われる。

問者は根機の低い者にも理解できるように、「教」と「禅」の内容を説明するように答者に求める。これに対し答者は「方便としての文字やことばに執られては本性を見失う。直ちに心をさとれ」と答える。

③『論』問答第六の「答」（『金沢文庫資料全書 第一卷 禅籍篇』一九〇頁上—下）

又云う。「罪福無主にして本より自性なし。只是れ妄心の思想より起これりと云ふことを。爾れば岸頼れて魚を殺し、風吹いて花を供す。然れど罪を受けたる岸も無く、福を招ける風もなし。思ひ無けりけるに依て受けず招かず有りけりと云ふことを『悟性論』に云く、《罪福は疑心より起これり》⁽⁸⁾と釋せり。實に心性を覺り知覺を顯して、一切の法に於て疑心無くして、了了に心を悟りぬれば、善惡はもとより兔頭に角を諍ひ、因果は始より龜上の毛を奪うに異ならず。」

冒頭の「罪福無主」だが、『論』では「罪福无主」である。意味内容から『論』の方が正しく、「褐」と「福」は字形が似ているので、『義』の書写の誤りかと判断できる。答者は、「罪福」も「善惡」も本来の心にはないことを説いている。

④『論』問答第十一の「問」と「答」(『金沢文庫資料全書 第一卷 禪籍篇』一九五頁上)

又云う。「此の如く科科の言有るに似たれども答へたまへる言は此れ心性をば離れず。然れば即ち禪宗の法門なりとやせん。又教門に順じて答へたまへるか。」

答て曰く「問するに順じて暫く教門の実を假りて出すばかりなり。禪宗の正意にはあらざるなり。」

実はここには大きな問題を含んでいると筆者は考える。

『義』では「答へたまへる言はこれ心性をば離れず」だが、『論』では「答へたまへるはこれ教相をば離れず」である。また、『義』では「問するに順じて暫く教門の実をかりて出すばかりなり」だが、『論』では「問するにしたがひてしばらく教門のことばをかりて云うばかりなり」とある。これら二箇所は、文脈・文意から見れば、『論』の「答へたまへるはこれ教相をば離れず」、「問するにしたがひてしばらく教門のことばをかりて云うばかりなり」のほうが妥当である。「教」の立場にいる日蓮宗の人々が、禪宗の考え方に反発して、これらの言葉を恣意的に変えた可能性はないだろうか。他にも、『論』では「真に(まことに)」のことばを『義』では「実に」と書いている点もある。また、『顕密問答鈔』においても『見性成仏論』の引用文を真言宗の立場でことばを改変している部分がある。鎌倉期、日本で流行し始めた禪宗のテキストに関し、他

『金網集』における「見性成仏義」について(古瀬)

宗による書写の姿勢を考察する必要があるかと考える。

⑤『論』問答第十二の「問」と「答」(『金沢文庫資料全書 第一卷 禪籍篇』一九五頁上)

問て曰く「正宗の實義を説きたまへ。是を悟らむ。」

答て曰く「泥牛虚に呌へ、木馬海に嘶て、木人笛を吹き、石女袖を摩で、石の虎山の麓に闔い、藁の花水底に積む時を待て、此宗をば云うべきなり。」

ここでの答者の答えは、論理的思考を用いては理解できない語句を投げかけているが、これらは宋代の禪の語録にしばしば散見される。ここでは答者が問者の思量分別を打ち砕く為に言ったと思われる。これら公案のような語句は『義』では六つ並べているが、『論』では「石虎山の麓に闔い、蘆花水底に沈ずまむ時を待ちて、此の宗旨をば述ぶべし。」と二句のみである。両者の相違の理由は定かではないが、このような公案のような手法を取り入れていることから、「見性成仏義」(または『見性成仏論』)が臨済禪の系統を引いた禪宗であることは明らかである。このような臨済禪の手法を使ったテキストが、金沢文庫所蔵『成等正覚論』の最後の部分にも散見され、⁽⁹⁾両者の共通性を感じることができ、詳細については今後の課題としたい。

『金網集』「第七禪見聞」は「見性成仏義」の後に、また、『血脈論』からの引用文が七箇所あり、最後は『宗鏡録』からの

『金綱集』における「見性成仏義」について（古瀬）

引用文で「禪祖師頌筆等事」を締めくくっている。

以上をまとめるならば、「禪祖師頌筆等事」における『義』の主張内容は、「文字に頼り、經典・經論の細かいことばに囚われるな」あるいは、「本来禪門はことばで表すことはできない」または「自心はすでに本覺または悟りの世界にいると直ちにさとれ」「思量分別から離れる」などの内容である。つまり、説法の内容は、主に不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏について易しく説明していることが理解できる。

二 『金綱集』『見性成仏義』（『義』）と金沢文庫所蔵『見性成仏論』（『論』）の表記上の比較

両者の比較において、第一に、書名が異なる。『金綱集』には「見性成仏義」とあり金沢文庫所蔵の方は『見性成仏論』である。『論』には外題として『見性成仏論』とあるが、内題には「見性成佛義序」と書かれ、恐らく『論』も作成当時は「見性成佛義」であつた可能性が高いと思われる。

次に、『義』と『論』の表記の相違を述べるならば、①『義』は漢字が多くカタカナが少ない。『論』は漢字が少なくカタカナ及びルビが多い。②『義』は比較的、漢文の形態（レ点、一二点等）を残したままである。一方、『論』は概ね漢文を読み下し、多くの漢字をカタカナに表記している。恐らく、親本が二種類以上存在し、それらは漢文で書かれていた可能性

が高いと考えられる。さらに『義』と『論』は部分的に内容量や表現が異なる部分も諸所に見られ、異なる親本から書写した可能性が見て取れる。

最後に、紙面の関係上全てを記載できないが、両者の異同について、主に『論』の判読不詳部分が『義』により判明した語句について述べる。（『論』は『金沢文庫資料全書 第一巻 禅籍篇』、『義』は『日蓮宗宗学全書』十四巻の頁を示した）

①『論』「菩提ミマユヲハアキラメムトイウナリ」（二七八頁上十一―十二）は『義』「菩提之道ヲ審メント云也」（三〇七頁より「菩提ミチヲハ」に改訂されよう）。

②『論』「モテアソハムニコト□ラスシカレハ」（二八〇頁上五）は『義』「翫ニ異ラム然ニ」（三〇八頁）より「コトナラス」となるう。

③『論』「知覺ヲアラハシ」「一切ノ法ニ」「心ナクシテ了々ニコ、ロヲサトリヌレハ善悪ハモトヨリ菟^{ウサギ}」「ラニツノアラソイ」（一九〇頁下六―八）は『義』「知覺ヲ顯シテ、一切之法ニ於テ無^{シテ}疑心^ニ了了^ニ悟^リ心ヲヌレハ、善悪は自^レ本兔頭^ニ角ヲ諍^ヒ」（三〇九頁）より「知覺ヲアラハシテ一切ノ法ニヲヒテ疑心ナクシテ了々ニコ、ロヲサトリヌレハ善悪ハモトヨリ菟^{ウサギ}佳シラニツノアラソイ」に改訂される可能性があるろう。

結び

一、『金綱集』において「見性成仏義」（または『見性成仏論』）は達磨三論に並ぶ日本の禪祖師のことばを掲載した禪テキストトとして重要視されていた。

一、『義』と『論』を照合すると、『義』は『論』から五箇所抜粋引用している。また、それらは、経論などの引用部分ではなく、主に筆者または祖師自身のことばで述べられた部分である。

一、相手の思量分別を壊すための公案のような語句が六つ記述され、『義』（または『論』）が臨済禪の系統にあることを示唆している。

一、『義』は『論』の内容と概ね同じであることが判った。しかし、細かい語句の異同の他、キーワードとなるような言葉が恣意的に改変されているように思える部分がある。

一、金沢文庫所蔵『見性成仏論』で判読不詳部分の数箇所が『金綱集』により明らかになった。

1 大会発表後、堀部正円氏に『金綱集』は日向撰によるものか、日進撰によるものかが日蓮宗の研究者により議論されている旨をご教示いただいた。

2 千葉正「二〇〇二」『宗学研究』四四、三〇頁上。尚、『見性成仏論』では「染」の後の一文字が判読不能であったが、『顕

『金綱集』における「見性成仏義」について（古瀬）

密問答鈔』により「浄」であることが明らかになったことを添えておきたい。

3 古瀬珠水「二〇一二」『見性成仏論』と『顕密問答鈔』の「禪門の人」の関係について」（『仙石山仏教学論集』六）。

4 石川力山「一九九三」『印度学仏教学研究』四二—一、一五六頁上。

5 『大方広円覚修多羅了義経』「雲駛月運舟行岸移亦復如是。」（『大正藏』一七、九一五下）。

6 「狙公斂芋日、朝三而暮四、衆狙皆怒、日、然別朝四而暮三、衆狙皆悦。」【莊子、齊物論】（『禅学大辞典』）。

7 『秘藏宝鑰』卷上「蝸角不得衝穹昊之頂。焦僥何能踐溟渤之底」（『大正藏』七七、三六六上）。

8 『小室六門第五門悟性論』「疑即成罪。何以故。罪因疑惑而生。」（『大正藏』四八、三七一下）。

9 石井修道「一九九二」『訓読『成等正覚論』』（『道元禅の成立史研究』、大蔵出版）、七二三—七四頁。

〈キーワード〉『金綱集』、「見性成仏義」、「見性成仏論」、日蓮宗（鶴見大学仏教文化研究所兼任研究員）